

自ら考え判断し，表現する子の育成（1年次） ～新聞を活用した伝え合いを通して～

新潟市立金津小学校

1 学校の概要

新潟市立金津小学校（渡邊敏尚校長，児童数252人）は，新潟市の南東部に位置し，秋葉丘陵の里山に囲まれ，近隣には八幡山遺跡や新潟市新津美術館など，自然・歴史・文化を身近に触れることのできる教育的な環境が広がっている。

教育目標「自ら学び しなやかに たくましく」のもと，小・中学校がそれぞれ一校という地域性を生かし，9年間を通して地域に根差した教育活動を展開している。「金津文化の日」や「小中合同防災訓練」「小中合同あいさつ運動」など，小学校・中学校・地域・家庭が一体となり，協力しながら教育に努めている。

2 NIE実践のねらい

（1）研修主題とのかかわり

今年度の研修主題は，「自ら考え判断し，表現する子の育成～新聞を活用した伝え合いを通して～」である。昨年度の後期に行われた児童アンケート「授業の中で，自分の考えを書いたり，伝えたりしていますか。」という項目で，否定的回答をした児童が26%と多く，全体の4分の1を占めている。「何を書けばいいかわからない」「どうしたらいいかわからない」など，課題に対して何もできないため，友達とのかかわり合いにまで発展することができない児童がいる。

そこで今年度は，新聞を授業の中に取り入れることで，児童が日常的に読んだり，書いたりすることに慣れることを目指した。また，2年間継続的に新聞記事を利用することで，児童の見方・考え方を広げ，表現する活動を通して，言語能力の育成を図ることができると考えた。

（2）児童の実態

4月に実施した学校アンケートでは，「新聞を読んでいますか？」の質問項目に対し，「ほとんど読まない」「全く読まない」と回答した児童は74.7%と，全体の約4分の3の子どもが新聞を読んでいることが分かった。「世の中のことを知る情報源」もテレビを選ぶ子がほとんどで，新聞から情報を得ている子は，15.6%だった。新聞に対してのイメージも「難しい」「漢字が多くて読めない」などと，新聞に対して否定的に感じていることも分かった。

そこで，新聞に対するイメージを一新し，新聞の良さを子どもたちに感じてもらう必要があると考えた。日常的に新聞に触れることで，新聞というメディアがもつ特性を感じたり，新聞を読むことで得られる知識を増やしたりしてほしいと願い，1年目の取組を始めた。

3 本年度実践の概要

(1) 新聞を身近に感じるための環境整備

子どもたちが各階の毎日目にするところに新聞各紙を設置することで、新聞に触れることができる場所を確保した。新聞は係の児童が毎朝新聞コーナーに移動し、最終的に図書室隣の教室に新聞が運ばれ、保管される。この教室に全新聞が保管されることで、職員も子どもたちも好きな新聞を好きな時間に読むことができるようにした。

掲示板も利用し、新聞記事に対しての自分の考えを子どもが付箋に書いて貼るコーナーを設置したり、学年に応じた内容の新聞記事や感想を掲示したりした。



新聞記事の周りには、付箋がいっぱい！



付箋に自分の考えを書く



学年掲示板



新聞コーナー

(2) NIEタイムの実施

毎週月曜日の朝学習15分間をNIEタイムとして設定し、6月から実施した(1年生は9月から)。最初は、「の」の字リレーや新聞パズルなどゲーム性のある活動に取り組んだり、新聞にはどんなことが書いてあるのかなどに注目させたりして新聞に慣れさせることから始め、新聞に興味をもたせた。

夏休み明けからは、新聞から学ぶことに力を入れ、新聞を読んで感想を書いたり、感想を交流し合ったりした。



(3) 図書館教育との連携

新潟日報「毎日ふむふむ」を1週間ごとに掲示し、子どもの目に付くようにしたり、読売 KODOMO 新聞を広げて読んだりできるようにした。また、図書館司書が気になる記事を掲示したり、図書館利用の学級に話をしたりすることで、新聞を読むことの楽しさを伝えた。

(4) 職員研修

4月に、新潟県 NIE アドバイザー古井丸裕三様（新潟市立曾根小学校校長）を講師として招聘し、NIE に関する基礎的なことや今後の取組の方法などについて職員研修を行った。早い時期に設定することで、職員全体で NIE の目的や意義を共通理解することができた。



8月にも古井丸裕三様を招聘し、研究授業を基に NIE 授業の在り方についてご指導いただいた。また、普段の取組の悩みなどにもお答えいただいた。

(5) 授業の中での新聞活用

今年度は、各学年1つ新聞を用いた授業実践を授業研究として行った。

日付	学年	教科	単元名等	新聞活用場面
7月14日	6年	学活	メディア時間について 考えよう	導入 (記事5つ)
9月26日	3年	国語	ローマ字	導入(写真) 展開(写真) 終末(写真)
10月20日	1年	道徳	いつもありがとう/ ありがとうが いっぱい	展開(写真)
11月6日 <計画訪問>	2年	道徳	せかいのことを知ろう/ 日本のお米, せかいのお米	展開 (記事5つ)
11月6日 <計画訪問>	4年	道徳	正しいことは勇気をもって 行動を/ いじめ 傍観者こそ勇気を	導入 (記事1つ) 展開 (記事1つ)
11月6日 <計画訪問>	特別支援	国語	組み立てを考えて書き, 知らせよう	展開 (記事2つ)
12月5日 <1年次公開>	5年	社会	未来をつくり出す工業生産	終末 (記事1つ)

4 実践例

(1) 第4学年 道徳

主題名「正しいことは勇気をもって行動を」A(1) 善悪の判断, 自立
教材名「いじめ 傍観者こそ勇気を」

① ねらい

いじめ問題について、いじめの四層構造を知り、いじめをなくすために何ができるのかを話し合うことを通して、いじめを止めるために自分にできることを実践しようという意欲と態度を育てる。

② 使用した新聞記事

2023年5月27日 新潟日報（導入時に活用）

2016年3月5日 新潟日報（展開時に活用）

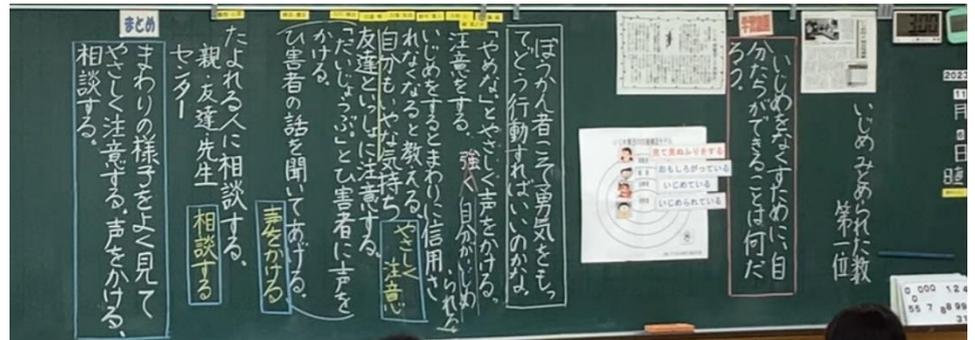
児童生徒千人あたりいじめ認知件数の順位
(政令指定都市全20市)

	1位 新潟市	2位 仙台市	3位 大阪市	4位	5位
2017年度	258.3件	173.5	99.9	北九州市 44.8	神戸市 40.5
18	250.9	184.3	130.0	札幌市 55.8	神戸市 46.8
19	259.3	170.9	125.2	札幌市 65.2	熊本市 63.6
20	214.6	139.4	114.3	熊本市 60.5	札幌市 52.2
21	232.2	152.3	124.0	堺市 67.6	神戸市 66.0

※ 文部科学省の資料を基に作成。各政令市の市立小・中、高校と特別支援学校が対象

③ 授業の実際

導入では、見出しを隠して新聞記事を子どもたちに提示した。表の中で、あることが新潟市が1位であることを



ことを押さえ、何が1位なのか予想させた。新聞記事の表は「いじめの認知件数」であることを知ると、自分たちが住んでいる新潟市が1位であることに、子どもたちはとても驚いていた。

展開では、中学生の投稿文の記事を提示することで、いじめには加害者と被害者だけでないことに気付かせた。加害者や観衆だけが悪いのではなく、被害者からすれば見て見ぬふりをする傍観者も同じ立場であることへ理解を促した。その後、傍観者にスポットを当てて話し合うことで、いじめをなくすために自分たちに何ができるのか考えやすくなった。

子どもの振り返り

わたしは、加がいに注意することはできませんが、ひがいの話を聞いてあげることができると思います。話を聞いてあげたら、少しでも気持ちが楽になると思ったからです。何もしないぼうかん者には、なりたくないです。

わたしは、いじめをあまりまわりで見えていないと思っていたけど、もしかしたらまわりの友達がいじめられているかもしれないと思いました。もし、いじめられている人がいたら、その人と相談したり、それでも方法がなかったら、大人の人に聞いたりしていじめられている人を助けたいです。

(2) 第5学年 社会科

教材名 未来をつくり出す工業生産(小単元:自動車の生産にはげむ人々)
～めざせ!世界一の自動車メーカー～

① ねらい

日本のこれからの自動車生産の在り方について、3つの視点「環境」「安全」「ユニバーサルデザイン」のどれに力を入れるか根拠をもって話し合ったり、新聞記事から「カー・オブ・ザ・イヤー」受賞の理由を考えたりする活動を通して、3つの視点に加え、新たに「消費者のニーズ」に寄り添うことも必要であることを理解することができる。

② 使用した新聞記事

2022年12月9日 読売新聞
(終末時に活用)

③ 授業の実際

単元を通して、子ども一人一人が「自動車会社の社長」という設定で学習を進めた。「自動車業界の100年に1度の変革期」の資料をもとに、これからの自動車生産の在り方について考えてきた。前時に様々な自動車会社の取組を新聞記事から読み取り、「環境」「安全」「ユニバーサルデザイン」の3つが大切であることを押さえた。

そこで本時では、グループごとに3つの視点のどれを優先するか話し合った。前時までに見出した現代社会の状況を示す諸資料を根拠にして、発表した。「環境」「安全」「ユニバーサルデザイン」の3つはやはり全てであることを押さえた後、昨年度の「カー・オブ・ザ・イヤー」に選ばれた自動車の新聞記事をロイロノートで配付した。子どもたちは、新聞記事を読むことで、3つの視点以外にも「価格」などの「消費者のニーズ」を踏まえてものづくりをすることが大切であるという新たな気づきを得ることができた。

今年、軽EVに栄冠

「サクラ」と「eKクロスEV」

自動車評論家ら選定された今年の「日本カー・オブ・ザ・イヤー」は、軽EVのeKクロスEV。トヨタの軽EV「サクラ」が、今年初の軽EVに選ばれた。トヨタは、軽EVの普及を促すため、eKクロスEVに決まった。1980年に同車種が誕生して以来、軽EVが普及するのには初めて、軽EVが栄冠に輝いた。

軽EVの普及は、今年6月に発表された。通勤や買い物といった日常での使用を想定して、軽EVの最大1800cc、4人乗車と、EVの価格の大半を占める補助金を活用し、国内を走る軽EVの普及を実現した。eKクロスEVは、軽EVの普及を促すため、政府が提供する補助金を活用し、国内を走る軽EVの普及を実現した。eKクロスEVは、軽EVの普及を促すため、政府が提供する補助金を活用し、国内を走る軽EVの普及を実現した。

「日本自動車工業会」は、今年6月に発表された。通勤や買い物といった日常での使用を想定して、軽EVの最大1800cc、4人乗車と、EVの価格の大半を占める補助金を活用し、国内を走る軽EVの普及を実現した。eKクロスEVは、軽EVの普及を促すため、政府が提供する補助金を活用し、国内を走る軽EVの普及を実現した。

子どもの振り返り

車づくりでは、消費者のことを1番に考えないといけないことがよく分かりました。他にも車をつくっている人は、消費者のために何を工夫しているのか調べたいです。



5 成果

4月に実施した学校アンケートと同じ項目で、12月にもアンケートを行った。12月のアンケート結果からは、半数以上の児童が「毎日新聞を読む」「時々新聞を読む」と回答していることから、春よりは確実に新聞に目を通す子どもが増えた。新聞に対しても、まだまだ読むことが難しいと感じている子どもも多いが、「子ども新聞だと読むことができる」「読むと1日のことを知ることができて、ためになる」など、新聞の良さにも気づき始めている。NIEタイムでは、同じ活動を繰り返し行うことで、確実に新聞の内容を読み取る力は付いてきたと感じている。

また、子どもたちだけでなく、職員にも変容が見られた。1年間NIEに取り組むことで、職員にとっても新聞が身近になった。職員室でも「この記事、授業に使えるぞ。」「こんな記事を探しているんだけど。」と新聞に関する会話が自然と生まれ、同僚性の発揮にもつながっている。

授業での新聞活用については、展開時や終末時に新聞を提示することで、新たな視点を獲得することに効果的であった。新聞を活用することで、新しい視点を与えることができ、視野を広げることに役立った。また、自分の考えを述べる際の根拠として記事を示すことで、自分の考えに自信をもつことにもつながった。

今年度の成果を生かしながら、来年度も実践に取り組み、「自ら考え判断し、表現する子の育成」を目指して、研修を進めていきたい。

(小林 雅代)